

『院政期の都市京都と政治』

美川圭*著、吉川弘文館、2024 年

佐 伯 智 広†

本書は日本中世前期の政治史・貴族社会史・都市史研究を牽引してきた著者による、第二論文集である。以下にその構成と概要を掲げよう。

第一部「権門都市・京都」は、成立期の中世都市京都および権門都市に関する 3 本の論文で構成されている。第一章「鳥羽殿の成立」では、白河天皇が後院として建設した鳥羽殿について、京中の院御所とは異なり、院近臣の宿所が建設され院の家政が行われた権門都市であったことを指摘している。第二章「院政と伏見」では、鎌倉時代後期に持明院統にとっての重要拠点となる伏見殿・伏見御領が後白河院によって形成される過程を明らかにしている。第三章「中世成立期の京都：権門都市の成立」では、成立期の中世都市京都について、平安京左京の再開発および白河への拡張による変容の過程と、新たに成立する鳥羽・六波羅・法住寺殿・八条・西八条・福原といった権門都市との関係を明らかにしている。

第二部「院と天皇」は、中世前期の院・天皇に関わる 4 本の論文で構成されている。第一章「崇徳院生誕問題の歴史的背景」では、崇徳院は鳥羽院ではなく白河院の子であるという言説について、藤原忠通と美福門院によって行われた謀略によるものと想定している。第二章「貴族たちの見た院と天皇」は、院政期の院・天皇の理想像が中国儒教の徳治主義による聖主・賢王主義に基づくものであり、そこから逸脱した院の行動が貴族たちの批判の対象とされていたことを指摘している。第三章「後白河院政と文化・外交：蓮華王院宝蔵をめぐる」では、後白河院の阿育王山舍利殿造営と日宋貿易について、漢籍証本や如意宝珠の輸入による権威の確立を目指したものと指摘している。第四章「後鳥羽院：万能の君の陥穽」では、後鳥羽院の生涯について、三種の神器のうちの神剣を欠いて即位したが、諸芸能の興隆を通じて権威を確立したこと、朝廷の権威を象徴する大内裏が鎌倉幕府の内紛にともない焼亡し、再建が難航したことをきっかけに、鎌倉幕府の武力による追討へと向かい敗れたことを指摘する。

第三部「摂関政治から院政へ」は、古代から中世にかけての政治制度の変遷と権力との関係に関する 3 本の論文と章で構成されている。第一章「摂関政治と陣定」では、陣定が摂関政治の成立にともなって元慶 4（880）年までに天皇御前の公卿会議の代替として始められたことを指摘している。第二章「中世天皇の退位・譲位」は、中世の譲位が、王家家長が直系子孫への皇位継承を望ん

* 立命館大学文学部教授

† 帝京大学文学部准教授

stomohiro@main.teikyo-u.ac.jp

で行うものから、近臣や外戚の介入により行われるものを経て、幕府に依存したものへと移行していくことを指摘している。第三章「建武政権の前提としての公卿会議：『合議と専制』論をめぐって」は、建武政権が伝統的公卿会議の解体を目指したとする佐藤進一（1983）の評価に対し、陣定・院御所議定・院評定制といった議政官による合議が、合議の主導者の権威を強化するように作用しており、建武政権の訴訟制度も鎌倉後期の体制の延長線上に評価できることを指摘している。付章「橋本義彦『平安貴族社会の研究』をどう読んできたか」は、橋本義彦『平安貴族社会の研究』（1976）の研究史上における位置づけを通して、今後の中世前期政治史・貴族社会史の課題を展望している。

第四部「院政期の貴族と史料」は、史料論に関わる3本の論文と二つの付論で構成されている。第一章「公卿補任」は、公卿の職員録である『公卿補任』の成立や諸本（特に冷泉家時雨亭文庫蔵本）の詳細を解説している。第二章「藤原定家『明月記』：激動を生きぬいた、したたかな歌人」は、『明月記』定家自筆本の問題を切り口に、日記の自筆本のあり方や定家の文化活動について分析している。第三章「折本と折紙：冷泉家時雨亭文庫蔵『朝儀諸次第』をめぐって」は、冷泉家時雨亭文庫蔵『朝儀諸次第』の成立や、折紙・折本という史料の形態の特質を考察している。付論一「藤原長家とその周辺」は、定家の4代前の祖である藤原長家の生涯を政治面について概観し、付論二「冷泉家に遺されたある没落貴族の系図」は、冷泉家の所蔵する書籍の紙背に残された文書の史料価値について、摂政藤原実頼の子孫で中世に没落する貴族の系図を例に挙げて解説している。

以上のように、本書には、中世日本史を研究する上で不可欠の要素である、空間構成・社会思想・文化・制度・史料（文字資料）といった諸問題について、重要な知見が幅広くちりばめられている。特に、権門都市概念の提起や、朝廷における合議制の意義についての指摘は、個別事例の枠を超えた広がりを持つ、非常に重要な論点である。

前者の論点は、戸田芳実（1991）によって示された、律令国家の都城平安京から、王朝国家の中央都市としての平安京または京都を経て、院政期～鎌倉初期に中世都市としての京都が成立するという変遷の見通しや、院政期に開発が行われる白河・鳥羽を「新都市」と位置づけた井上満郎（1989）の研究を踏まえて出されたものである。著者の見解は、白河を平安京の条坊制の影響を受けた古代的な都市計画によるものとみなすのに対し、鳥羽を王家が権門としてつくった最初の権門都市と評価し、その後の一連の権門都市との共通性を見出すところに特色がある。なお、第一部第三章の初出は2002年であるが、著者は同年に刊行された概説書でも共通するテーマで執筆しており（美川, 2002）、合わせて読むことでより理解が深まるであろう。

また、権門都市の概念について、山田邦和（2012）は、「治天の君としての院が建設を主導して造られ、平安京を補完する機能を持つ新都市」を、特に院政王権都市と規定している。同じく山田邦和（2022）は、古代から近世初頭までの平安京・京都の変容を概観している。本書の刊行を受けて、今後のさらなる研究の進展が期待されるところである。

後者の論点は、著者が第一論文集（美川, 1996）で明らかにした院政期の公卿議定制、特に院政と院御所議定・院評定制の関係の問題から、前後の摂関政治期・建武新政期を視野に入れて、研究を発展させたものである。著者はさらに、律令制期～建武新政期までの公卿会議について概観した新書も刊行している（美川, 2018）。

鎌倉幕府における訴訟制度など、中世日本において広範に存在する合議制がどのような政治的意義を持つものであったのかという問題は、最重要の論点の一つである。この点を解明する上で、著

者によるこれらの諸研究の成果は、きわめて重要である。

以上のように、本書はこれからの日本中世史研究に裨益するところが多い。今後必ず参照されるべき、基本文献であるといえよう。

参考文献

- 井上満郎（1989）「院政期における新都市の開発：白河と鳥羽をめぐって」安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相 上』333-365 頁，吉川弘文館。
- 佐藤進一（1983）『日本の中世国家』岩波書店。
- 戸田芳実（1991）「王朝都市論の問題点」（初出 1974）『初期中世社会史の研究』175-185 頁，東京大学出版会。
- 橋本義彦（1976）『平安貴族社会の研究』吉川弘文館。
- 美川圭（1996）『院政の研究』臨川書店。
- （2002）「京・白河・鳥羽 院政期の都市」元木泰雄編『日本の時代史 7 院政の展開と内乱』223-255 頁，吉川弘文館。
- （2018）『公卿会議：論戦する宮廷貴族たち』中公新書。
- 山田邦和（2012）『日本中世の首都と王権都市 京都・嵯峨・福原』文理閣。
- （2022）『京都の中世史 7 変貌する中世都市京都』吉川弘文館。